愛知大学図書館簡齋文庫を訪れて

東京大学東洋文化研究所教授　日本中国学会理事長　大木 康

主として中国哲学、中国語学・文学、そして日本漢学の専門研究者によって組織されている日本中国学会という学会があります。会員の総数は1500名にのぼります。この学会では、毎年機関誌『日本中國學會報』の発行と、全国大会の開催とを活動の主たる柱としています。大会は、全国各地の大学が持ち回りで開催を担当しておりますが、2021年の第73回大会は、愛知大学が開催担当校でした（代表は文学部、臼田真佐子教授）。本来であれば、愛知大学名古屋校舎に全国から会員が集まり、盛大な大会が開催されるはずでした。ところが、長引くコロナ禍のため、会場開催ができなくなり、オンラインによって開催されました。名古屋に集まることはできませんでしたが、10月9日㈯、10日㈰の二日間にわたり、多くの研究発表と活発な討論が行われました。この間、愛知大学の先生方には、大会の準備、当日の進行、そしてオンライン故の技術的サポートなど、大いにご尽力いただき、大会を成功裏に終えることができました。愛知大学の先生方に心より御礼申し上げたいと思います。

そして、研究発表や特別講演会が行われたばかりでなく、愛知大学図書館所蔵簡齋文庫のオンライン展示が行われました（オンライン展示は、現代中国学部、木島史雄准教授が担当）。わたし自身、中国の明清時代の江南地方を中心とする文学に興味を持ち、以前上海に留学し、いまでもしばしば彼の地を訪れていることから、愛知大学の前身が、かつて上海にあった東亜同文書院大学であり、また学生時代からお世話になっている『中日大辞典』が、ここ愛知大学で編纂されたことなどは知っておりました。しかし恥ずかしながら、簡齋文庫についてはこれまでまったく知りませんでした。今回の展示を通し、小倉正恒と簡齋文庫の漢籍について知ることができましたが、これはまことに驚くべきコレクションです。

小倉正恒と簡齋文庫の漢籍

小倉正恒（1875〜1961）という方は、戦前の日本で、住友財閥の大番頭ともいえる方です。学者というわけではなく、実業界に身を置いていた方です。その小倉正恒が、これだけの分量の貴重な漢籍を集めていたことが、最初の驚きです。調べてみますと、小倉正恒は金沢の生まれで、第四高等学校時代、三宅真軒先生に学び、漢学の素養を積んでいたようです。小倉は、その後東京帝国大学法学部に学び、実業の世界に進むのですが、その学問、というより人間形成の根本に、漢学があったといえるでしょう。漢学に限ったことではありませんが、現在、専門教育が重視される一方、人間形成の根本に関わる教養の形成が軽視されているように思われるのは、

まことに残念なことです。

後で触れますように、小倉正恒は自身漢詩も作りましたし、昭和四年（1929）に中国に旅行した時の記録である『蘇浙游記』は、すべて漢文で書かれています。功成り名を遂げた後も、三宅真軒先生を招いて教えを受けていたようで、書物を読み、学び続けた生涯だったといえるでしょう。

こうした蔵書やコレクションは、しばしば散逸してしまうものですが、簡齋文庫が愛知大学にまとまって収蔵されたことで、貴重な書物が今日にまで残されたわけです。愛知大学のご努力も多としたいと思います。

小倉正恒は、当時の日本の経済界の中心的人物の一人で、昭和四年の春、上海を中心に、蘇州、杭州、南京など中国江南の各地を視察します。この記録が『蘇浙游記』です。これを見ていると、中国の政界、経済界を代表する多くの人物と会っていることがわかります。こうした中国の大人（たいじん）たちと会って、堂々と渡り合えたのは、その漢学の素養があったからにほかなりません。中国人は、人を見ます。学問がないと見ると、ばかにするのです。これはきわめて現代的な課題でもあって、どんな分野においても、中国人とほんとうに対等に渡り合おうと思ったら、学問を積む必要があるのです。

例えば、このとき、四月十九日に上海の六三花園（日本庭園を持った日本式料亭）において招宴を開き、中国政財界の名士や日本の外交官など60余名を招待しています。はじめに挨拶した小倉は、自身の二首の漢詩を披露しています。『蘇浙游記』には、その時多くの来客が小倉の詩と同じ韻字を使って唱和した詩が収められています。そのなかに、趙晋卿という人の詩を見ることができます。現在簡齋文庫に蔵されている、清の詩人王士禎（王漁洋）の詩集『蠶尾集（さんびしゅう）』は、この趙晋卿（晋卿は号で、名は趙錫恩）が小倉正恒に贈ったものです。蜀錦を貼った帙に入り、本には金鑲玉装という特別な装幀が施されていて、いかにも豪華な贈り物といった書物です。帙には「奉贈小倉正恒先生恵存　中華民国十九年上海趙錫恩並識」と記されています。趙錫恩という方は、大学などの高等教育にも深く関わった方ですが、この当時、中華民国政府工商部の上海事務所長の任にあったようです。事業の上で、小倉正恒にとって、最も関係の深い人といえるでしょう。このような関係であっても、詩のやりとりをし、古い書物を贈答品として贈るなど、風雅な交際が行われていたさまをうかがうことができます。

その後、戦争中の昭和十九年（1944）、当時の中華民国（汪兆銘政府）駐日本大使蔡培が、東京の大使館において、九月九日、重陽の節句に、当時の学者や政治家を招いて宴会を開きました。そこで参加者が詩を作り、それを集めた詩集が刊行されています。これも愛知大学図書館所蔵の『甲申重九雅集吟稿』という詩集です。当時、南京国民政府全国経済委員会最高顧問の任にあった小倉正恒も、この重陽の節句の会に招かれました。たまたま本人は出席できなかったようですが、そこで開催された詩の会のために詩を寄せています。その一首を見てみましょう。

星槎邂逅一経年　星槎に邂逅して一たび年を経（へ）
如玉温容憶古賢　玉の如き温容に古賢を憶う
禹域登高重九節　禹域 登高 重九の節
日東張讌未旬天　日東 張讌 未旬の天
白衣旧事添清夢　白衣の旧事 清夢を添え
嘉帽遐蹤博巨篇　嘉帽の遐蹤（かしょう） 巨篇を博す
倏佩茱萸君莫笑　倏（たちま）ち茱萸を佩するも 君笑う莫れ
難将二豎付雲煙　二豎を将（もち）て雲煙に付すること難し

「星槎に邂逅して」とありますから、大使の蔡培とは、一年前に偶然船中で出会ったのでしょう。その温容は、いにしえの賢人を思わせる。中国では九月九日に高い所に上り、茱萸（しゅゆ）を髪に挿し、菊の花をいれた酒を飲む風習があります。日本において、その重陽の宴席が張られてから、いままだ十日も経っていない。重陽の日に飲む酒がなかった陶淵明に、王弘が白衣の召使いを遣わして酒を届けた故事のように、そして重陽の日の宴席で、風に吹き落とされた帽子にちなんで即座に名文を書いた孟嘉のようなすばらしい詩文が多く作られた。ふと茱萸を身につけてみるが、どうか笑わないでいただきたい。自分も宴席に侍りたかったのだが、二豎（病気）を雲煙のように、はかなく消してしまうことができなかったのだから。

特に頸聯は、重陽にちなんだ陶淵明と孟嘉の故事を用いた、よくできた対句であって、小倉正恒の漢詩の力量を如実に示していると思います。

簡齋文庫には、たいへん多くの貴重な本があります。わたしも今年の春、愛知大学を訪れ、書庫に収められた簡齋文庫を拝見させていただいたのですが、とても半日くらいでは足りません。また何度も訪れなければならないと思っています。

小倉正恒その人の紹介にかなりの紙数を費やしてしまいましたが、簡齋文庫の目録（『愛知大学漢籍分類目録』に収録）と実際の訪書にもとづいて、わたしの目から見て、面白いと思われる簡齋文庫の特色について、以下に紹介させていただきたいと思います。

中国の伝統的な図書は、経史子集の四部（及び叢書）に分類されます。多くの蔵書には、集めた方の興味と専門によって、経部が多いとか、集部が多いとかの偏りが見られるのが普通です。ところが、簡齋文庫は、経史子集と叢書、すべてにおいて充実した蒐書が見られることが、一つのすぐれた特徴です。

そうした中で、さらにいくつかの特徴を挙げるといたしますと、中国の本に関して、宋元版のような特別に古いものはありませんが、明版、清版で構成されていること。宋元版は、貴重なものでありますが、時に骨董的な価値に重きが置かれるのに対して、明版、清版は、実用的というか、実際に学者が研究のために読むものであって、まさしくそうした目的をもって集められていることがうかがわれます。

その中で、わたしが目を引かれましたのが、清代の人の詩文集、とりわけ清代後期の作者の詩文集が数多く収められていることです。実際、明治に生まれた小倉正恒にとって、清朝末期は同時代です（辛亥革命によって清朝が倒れ、中華民国になるのは、日本では大正元年のことです）。そして、例えば『行有恒堂初集』、『小谷口詩鈔』などは、日本ではこの愛知大学にしか収められていないもののようです。

また、経部、集部を中心に、朝鮮の学者文人の著作が多く収められているのも一つの特色です。さらに、日本の江戸時代の学者の著作が、刊本としてではなく、写本の形で収められているのも、特色の一つとして挙げることができるでしょう。これについては、その一つ、『韓非子翼毳』について、木島史雄准教授が『韋編』第48号（2021）に紹介しておられます。

ほんの一例を挙げただけですが、こんなすごい本が図書館に収蔵されているわけで、愛知大学の先生方や学生さんたちがうらやましく思われるばかりです。是非とも、この本を使って、大いに勉強していただき、学問、人としての基礎的な教養を身につけていただければと思います。